「二度と戦争繰り返さないで」

「戦争繰り返すな」

四日市空襲体験者語る

太平洋戦争末期の四日市空襲の体験者が当時を語る「再びふるさとを戦火にさらさぬために」（中日新聞社後援）が十六日、四日市市勤労者・市民交流センターであった。

春日一彦さん(八〇)＝名古屋市西区＝と河村紀子さん(八五)＝四日市市中町＝の二人が「二度と戦争を繰り返さないでほしい」と訴えた。

市民団体「四日市革新懇話会」が、戦後七十年を控え、戦争の記憶を語り継ごうと開き、約六十人が来場した。

市街地に焼夷弾が降り注いだ一九四五（昭和二十）年六月十八日未明、国民学校六年だった春日さんは家族と避難したが、父は遺体で見つかった。

春日さんは空襲下で市民に消火活動を義務付けた当時の「防空法」に触れ「町内会の役員だった父は消火活動をして亡くなったのだろう。戦争では真面目な人が犠牲になる」と理不尽さを話した。

高校生だった河村さんは空襲下、母と三滝川に飛び込み、十時間余り漬かって戦火を逃れた。「焼夷弾は川の中まで燃える。周りは阿鼻叫喚の光景で、生きた心地がしなかった」と振り返った。

また、集団的自衛権の行使容認について批判し「国のために私たちが命を落とす時代が来たらどうなるのか」と話した。

（河崎裕介）

四日市空襲の体験を振り返る河村紀子さん

空襲で亡くなった父について語る春日一彦さん＝いずれも四日市市勤労者・市民交流センターで

2014.8.17(日) 朝日

空襲で父は焼死

「経験語り継ぐ」

四日市で講演

約800人が亡くなった四日市空襲を語り継ごうと、四日市市で16日、市中心部で空襲を体験した春日一彦さん(80)＝名古屋市西区＝らが講演した。約50人が生々しい体験談に耳を傾けた。

69年前の1945（昭和20）年、海軍の燃料廠などがあった四日市市は米軍の攻撃目標にされ、6月から8月にかけて空襲を受けた。市内の約35%が焼失したと言われ、市街地は焼け野原になった。

中学校教員を長年勤めた春日さんは当時、国民学校6年生だった。市中心部にあった自宅で空襲に遭った。家族で逃げようとすると、周囲はすでに火の海。「逃げる途中で、目の前に焼夷弾が落ちて、行く手を阻んだ。混乱の中で妹を見失ってしまった」。

国民学校の校庭で一晩を過ごし、翌朝、自宅近くの公園に行くと、はぐれた妹と再会。一時は喜んだが、地区の役員を務め、住人の誘導などに当たっていた父が焼死したことを直後に知ったという。

春日さんは「涙の再会の1、2時間後には涙のこの別れだった。このときのことは今でも忘れらない。この経験を語り継いでいきたい」と語った。

（坂本進）